

## チーム青森県病薬 1 つになって

青森県病院薬剤師会会長

田村 健悦 Kenetsu TAMURA



青森県病院薬剤師会（以下、青森県病薬）の上半期最大のイベントは6月に開催した日本病院薬剤師会東北ブロック第13回学術大会です。参加者数は500人を超え、無事成功裏に終えることができました。ご参加いただいた皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

メインテーマは「地域医療にあるべき薬剤師像を目指して」としました。青森県をはじめ東北各県は病院薬剤師数が不足し、地域偏在という問題を抱えています。しかしながら、患者を目の前に薬物治療管理の歩みを止めることはできません。機能や規模の異なる病院同士が手をつなぎ、地域の保険薬局と連携、一丸となって、地域医療提供体制のなかであるべき薬剤師像を自分たちで築きあげる姿勢が重要であると考えています。

昨年、県内の薬剤師の不足状況をアンケート調査しました。各病院における薬剤師数は薬剤部門が希望する薬剤師数に対し不足している施設が全体の約74%あり、半数以上の施設では、薬剤師の募集を行っても、そのほとんどで募集人数を満たす採用ができていない状況が明らかとなりました。給料が安いことを理由に挙げる回答が圧倒的でした。また、薬剤管理指導料、病棟薬剤業務実施加算の届出率は全国に比べ非常に低く、その要因として「マンパワーが足りない」が筆頭に挙げられました。一方、すでに勤務する薬剤師は県内出身者が90%を占めていて、なぜ病院を選んだのか理由を問うと、「勉強になる」、「チーム医療に参画したい」、「やりがい」が上位を占めました。

緊張の連続だった東北ブロック学術大会。その閉会式を終えた後、ステージ上に集まった仲間たちの顔を見ると込みあげてくるものがありました。チーム青森県病薬が1つになった瞬間でした。「温故知新」前会長の早狩誠氏からいただいた言葉です。諸先輩方が最先端の研究に取り組み、先見性をもって新たな業務を展開した結果、患者やほかの医療スタッフから信頼を得、評価されるようになりました。その基盤のうえに今日の私たちがいます。夢と希望をもてる、魅力的な薬剤師職能を築くことが未来の青森県病薬をつくる。そう信じて青森県の薬剤師確保対策に取り組んでいきたいと思えます。